⑹ 昆虫類 ⑱ トンボ目

トンボ目昆虫は日本には約200種が生息し、埼玉県からはこれまでに12科93種が記録されている。本書を刊行するにあたり、そこから外来種や迷入種などを除いた88種を対象に本県における生息状況を調査した結果、その約45%にあたる40種をレッドリスト掲載種とした。

これまでのトンボ目昆虫の掲載種数の変遷をみると、初版と改訂版の34種、前版での39種、そして今回の40種と、徐々にではあるが絶滅を危惧すべき状況にあるトンボ類は確実に増加していることが見てとれる。

これらの中には、2年ほど前から県内で新たな生息地が次々と発見されるなどしてレッドランクが前版のCR+ENから今回のVUに下がったトラフトンボ（エゾトンボ科）や、ホソミイトトンボ（イトトンボ科）のように数年前から急速に分布が拡がったことが確認されレッドリストから外した種もあるが、調査した多くの種について生息地の減少や個体密度の低下など、生息状況が悪化していることが明らかになった。

その原因については、まず生息環境そのものの消失があげられる。この傾向は特に湿地的な環境に強く依存している種に顕著で、秩父地方のいくつかの谷戸では、周辺水路の整備が進んで湿地の乾燥化が急速に進行したためにモートンイトトンボ（イトトンボ科）が姿を消した例があり、また、低地帯でも湿地の乾燥化や土地開発によりハラビロトンボ（トンボ科）の生息地の減少が顕著である。

バス類やブルーギルなどの肉食外来魚の移植・再放流は法律等で禁止されたとはいえ、これらの存在は止水性のトンボ類にとって大きな脅威になり続けている。県内での具体的な捕食例として、若菜（1997）は長瀞町での観察例として、産卵中のギンヤンマ（ヤンマ科）とショウジョウトンボ（トンボ科）の成虫がブラックバスによって捕食されたことを報告しており、最近でも、2015年に熊谷市の大沼公園で水面上を飛翔していたクロイトトンボ（イトトンボ科）にオオクチバスが飛びかかったのを目撃している。

このように止水性種の生息環境が悪化の一途を辿るなか、国レベルで絶滅危惧種Ⅰ類（EN）に指定されているオオセスジイトトンボ（イトトンボ科）とオオモノサシトンボ（モノサシトンボ科）の2種が生息している北葛飾郡杉戸町にある調節池が、2016年に環境省による『生物多様性の観点から重要度の高い湿地』の一つに選定された（環境省，2016）ことは、希少種の生息環境保全という観点からは明るいニュースと言える。現地では、2014年以降この2種やベニイトトンボ（イトトンボ科）の個体数減少が目立っており、これら希少種トンボを含む水生昆虫全般の安定的な生息環境の維持が期待される。

流水性の種は、特に1960年代以降の中川・加須低地における河川環境の悪化が顕著（長須，1978）で、アオハダトンボ（カワトンボ科）・メガネサナエ・キイロサナエ・ホンサナエ（以上サナエトンボ科）・キイロヤマトンボ（ヤマトンボ科）などが1960年代にこの地の河川から姿を消したとされ、今回の調査でも、これらの種が県東部の平野部で復活したという知見は得られな

かった。

このような傾向はすでに大宮台地西部を流れる荒川や丘陵帯の河川にも現れており、これらの種のいくつかは今回の改訂における全県評価でも《絶滅危惧》の扱いをせざるを得ないほど、生息可能な環境そのものが県下から急速に消えつつあると言える。

トンボ類の生息環境保全という視点では、特に都市近郊に数多く造られている修景池を配置した緑地公園や自然公園と称される公園の存在は評価される。このような公園に造られた水生植物群落を伴う池沼は、飛翔力の強い止水性のヤンマ類などにとって新たな生息地としての機能をすでに果たしている。

また、1980 年代から寄居町の山間で実践されてきた、耕作放棄水田を水辺ビオトープとして活用する取り組みでは、止水性種を中心にトンボ類の生息環境創成に大きな効果があることが報告された（新井，2016）。同地での 20 年以上にわたる生息種の変遷をまとめた資料は、様々なトンボ類の環境選好性の傾向を比較しながら読み取る資料としても貴重である。

なお、ビオトープ池創成事業などで、本来はその地域に分布していない水生植物が持ち込まれる事例も散見され（たとえば碓井，2016a）、場合によっては組織内産卵をするトンボ類の卵がそれら水生植物の移植によって随伴移入される可能性もあると考えられる。人工的な池を植生豊かにする取組みについては、移植する植物種の選択や採取地に細心の注意が必要である。

また、いわゆるトンボ愛好者によってある種のイトトンボ類やヤンマ類が本来の生息地以外の場所に意図的に放虫されている事例も県内で数例が知られているが（たとえば碓井，2016b）、このような行為は決して好ましいものではない。

［付記］次ページ以降の種ごとの解説において、形態や国内分布などに関する項目は、尾園ほか（2012）および環境省（2015）を参照した。

科　名　アオイトトンボ科

埼玉県(2018)　EX　環境省(2015)　EN

〔和　名〕**コバネアオイトトンボ**

〔学　名〕*Lestes japonicus* Selys

指定状況　－

【形　態】全長 38 ～ 44mm、後翅長 18 ～ 22mm。翅は透明で、胸部と腹部の地色は光沢のある緑色。

【国内分布】本州、四国、九州　いずれの分布域でも産地は局地的。

【主な生息環境】平野から丘陵地にかけての抽水植物が豊富な水質のよい池沼に生息する。

【県内での生息状況】1963 年に旧幸手町（現幸手市）、旧大利根町（現加須市）、旧栗橋町（現加須市）で記録された（長須，1978）のを最後に、埼玉県内での確認事例はない。1950 年代の記録も低地帯に限られている。

【特記事項】埼玉県内では低地帯の植生豊かな池沼に限って生息していたと推定される。本種は抽水植物の茎などに組織内産卵をするが、全国的にみても生息地が限定される要因として、宮崎・松木（1992）は、本種のメスは産卵管があまり発達しておらず、組織が比較的柔らかな抽水植物を選択して産卵する習性にあるのではないか、と指摘している。

科　名　イトトンボ科

埼玉県(2018)　EX　環境省(2015)　－

〔和　名〕**オゼイトトンボ**

〔学　名〕*Coenagrion terue* (Asahina)

指定状況　－

【形　態】全長 33 ～ 40mm、後翅長 18 ～ 24mm。翅は透明で、成熟個体の体色は、オスは青色、メスは薄緑色と青色の 2 型が知られる。雌雄とも腹部背面には細長い黒斑が続く。

【国内分布】北海道、本州（信越地方以北）　日本特産種

【主な生息環境】抽水植物や浮葉植物が繁茂する明るい池沼や湿地に生息する。

【県内での生息状況】皆野町の小規模な湿地で 1993 年 6 月に県内で初めて発見され（松崎，1993a）、その翌年までは同地での生息が確認されたが、1995 ～ 1997 年には丹念な調査にもかかわらず発見できなかった（松崎，1998a）。その後も周辺地域も含めて生息調査が繰り返されたが、これまでに再発見されていない。

【特記事項】

科　名　サナエトンボ科

埼玉県(2018)　EX　環境省(2015)　VU

〔和　名〕**メガネサナエ**

〔学　名〕*Stylurus oculatus* (Asahina)

指定状況　－

【形　態】全長 61 ～ 69mm、後翅長 34 ～ 38mm。翅は透明で、胸部から腹部にかけて黒色の地色に明色斑をもつ。雌雄とも腹部第 7 ～ 9 節が横に拡がる。ナゴヤサナエ *S. nagoyanus* とごく近縁で、オス腹端部の微細な形状などで両種を区別する必要がある。

【国内分布】本州（東北地方から近畿地方にかけて産地はきわめて局地的）　日本特産種

【主な生息環境】現在では、琵琶湖（滋賀県）、諏訪湖（長野県）、愛知池（愛知県）などの湖とその流入、流出する河川にのみ生息する。

【県内での生息状況】これまで県内では 1960 年代前半に東松山市で 2 例、旧幸手町（現幸手市）で 1 例の計 3 例しか採集記録がなく、その後は目撃記録すら全くない。現在は，本種のヤゴが好む生息環境自体が本県にない。

【特記事項】東京大学総合博物館（2013）により、上記の東松山市で得られた 2 個体の標本写真が Web 上で公開されている。東日本における本種の分布については、多産地である琵琶湖からのアユ種苗による随伴移入の可能性が指摘されている（佐久間ほか，2005; 尾園ほか，2012）。

科　名　トンボ科
〔和　名〕 **ハッチョウトンボ**
〔学　名〕 *Nannophya pygmaea* Rambur

埼玉県(2018)　EX　環境省(2015)　－
指定状況　－

【形　態】 全長 17 ～ 21mm、後翅長 12 ～ 16mm。在来種のトンボ類の中で最小。翅は透明で基部近くは橙色が拡がる。成熟したオスは胸部から腹部にかけてほぼ赤色一色、成熟メスは暗色の地色に黄色斑がある。

【国内分布】 本州、四国、九州

【主な生息環境】 丘陵地から尾瀬ヶ原のような高層湿原までの、草丈の低い植物がまばらに生えているような湿地的環境に生息する。

【県内での生息状況】 県内では 1950 年代の旧日高町（現日高市）女影と、1970 年代の熊谷市大麻生での生息が知られるのみ。いずれも当時の生息環境は残っていない。

【特記事項】 東京大学総合博物館（2013）により、上記の旧日高町で 1959 年代に得られた成虫 3 個体の標本写真が Web 上で公開されている。初版刊行時にはすでに県内には本種が生息できる環境が残っておらず、初版から絶滅種としている。

科　名　トンボ科
〔和　名〕 **ベッコウトンボ**
〔学　名〕 *Libellula angelina* Selys

埼玉県(2018)　EX　環境省(2015)　CR
指定状況　国内希少野生動物種

【形　態】 全長 39 ～ 45mm、後翅長 30 ～ 34mm。翅は透明で前後翅とも結節附近と翅端近くに明瞭な暗色斑がある。体色は胸部から腹部にかけてほぼ褐色一色。

【国内分布】 本州、四国、九州　いずれの分布域でも産地は局地的

【主な生息環境】 平地から丘陵地にかけての抽水植物群落が発達した池沼に生息する。周囲に草原があることも生息地として重要な要因とされる。

【県内での生息状況】 1950 年代後半から 60 年代前半にかけて、羽生市や旧浦和市・大宮市（現さいたま市）、川越市などから 6 例の記録があるのみ（長須，1978）。おそらく、かつては低地帯から台地・丘陵帯にかけて植生豊かな池沼には広く生息していたと考えられる。

【特記事項】 関東地方以北では絶滅したと考えられている（環境省，2015）。種の保存法により採集は禁止されている。

科　名　イトトンボ科
〔和　名〕 **オオセスジイトトンボ**
〔学　名〕 *Paracercion plagiosum* (Needham)

埼玉県(2018)　CR　環境省(2015)　EN
指定状況　－

【形　態】 全長 39 ～ 49mm、後翅長 21 ～ 27mm。翅は透明で、胸部と腹部の地色は、成熟したオスは青色、メスは黄緑色。

【国内分布】 本州（東北地方の一部、新潟県、関東地方の一部。いずれの地でも産地は局地的）

【主な生息環境】 平野部の沈水植物や浮葉植物が繁茂する明るい池沼に生息する。

【県内での生息状況】 本県での 1960 年代までの既知産地は、すべて中川・加須低地に含まれる水生植物豊かな池沼であったが、それらの多くが 1960 年代半ばまでに埋め立てなどで消滅したという（長須，1978）。1964 年の羽生市三田ヶ谷での記録を最後に、本県からは 30 年以上、記録が途絶えていたが、1999 年に旧鷲宮町（現久喜市）でオス 1 頭が採集された（古城，1999）。その後の調査では同地で本種を確認できず、この個体の由来は不明とされた（碓井，2016a）。現存する県内唯一の生息地である杉戸町の調節池は、2006 年に新たに発見され（長須，2007a,b,c）、最近まで良好な発生状況を維持していたが、2014 年以降に発生数が激減した。この現象は、池内に繁茂するハスを花期終了後も放置し続けたことで水中に残った大量の枯死部が水質悪化を招いていることと、池周辺の草地の年複数回の除草により、本種の未熟時の生活空間が失われていることの２つが主要な原因であろうと、これまでの10年間の継続調査から推察される。

【特記事項】 隣接する都県では、群馬県と東京都に記録があるが、それらの地ではすでに絶滅した可能性が高いとされている(群馬県, 2012; 東京都, 2013)。上述の杉戸町の生息地は、環境省により『生物多様性の観点から重要度の高い湿地』として2016年に選定された。選定理由は「局限分布する希少なトンボ類２種の生息地」(環境省, 2016)。

科　名　イトトンボ科

〔和　名〕 **ヒヌマイトトンボ**

〔学　名〕 *Mortonagrion hirosei* Asahina

埼玉県(2018)　CR　環境省(2015)　EN

指定状況　－

【形　態】 全長 29 ～ 34mm、後翅長 13 ～ 16mm。翅は透明で、成熟した個体の体色は、オスは胸部側面は明るい緑色で腹部は淡褐色、メスは胸部から腹部にかけて全体がほぼ淡褐色。西日本ではメスにオスと同じ体色の型も出現する。

【国内分布】 本州（宮城県以南の一部）、九州（大分県・長崎県 [対馬のみ]）　いずれの分布域でも汽水域にのみ生息地が局在する。

【主な生息環境】 汽水域の池沼や密生したヨシ原に生息する。汽水環境に特異的に生息する要因として、本種ヤゴは捕食者である他種のヤゴよりも塩分耐性が高く、結果として捕食者が生息できない汽水域に生息していると考えられている（小神野ほか，1997）。また、生存競争に弱い成虫も捕食者である他種のイトトンボ類などが飛翔しにくい空間として密生したヨシ原を利用している、との指摘もある。

【県内での生息状況】 本県では 1980 年に三郷市の中川の岸辺で初めて生息が確認され、のちに対岸の八潮市側にも生息地が発見された（三田村，1980）。県内でこれまでに知られる生息地はこの 1 ヶ所のみで、当地の自然個体群が最後に確認されたのは 1998 年 7 月と思われる（建設省江戸川工事事務所，1999）。

【特記事項】 生息地の一部である中川八潮地区木曽根地先において、建設省（当時）は本種の生息環境であるヨシ原を拡大する実験造成を 1998 年から実施。その後、同地における本種の自然移入の調査やヤゴの飼育放流などを 10 年以上継続的に行ってきたが、現時点で同地における本種の定着は確認されていない。本種はヤゴも成虫も環境選好性の幅がきわめて狭く、本種の生息環境を人為的に創成・維持することは非常に難しいことが伺える。国土交通省江戸川河川事務所調査課（2005）によれば、飼育舎で累代飼育して確保していた同地系統のヤゴを 2005 年 3 月、6 月の 2 回に分けて合計 13,000 頭を実験区に放流したが、同年の発生期調査では 4 頭の成虫が確認されたのみで、次年度は幼虫、成虫とも確認できなかったという。
なお、本種は関東地方では埼玉県の他に茨城県、千葉県、神奈川県、東京都から記録されている。近県ランク　東京 : 絶滅危惧ⅠＡ類、茨城 : 絶滅危惧ⅠＡ類、千葉 : 最重要保護生物（絶滅危惧ⅠＡ類相当）、神奈川 : 絶滅。

科　名　エゾトンボ科

〔和　名〕 **エゾトンボ**

〔学　名〕 *Somatochlora viridiaenea* Uhler

埼玉県(2018)　CR　環境省(2015)　－

指定状況　－

【形　態】 全長 53 ～ 74mm、後翅長 37 ～ 46mm。翅は透明で、胸部から腹部にかけて未成熟個体では光沢のある緑色の地色に黄色斑をもつが、成熟すると特にオスでは黄色斑は目立たなくなる。

【国内分布】 北海道、本州、四国、九州

【主な生息環境】 平地から丘陵地で周囲に樹林があるような湿地などに生息する。

【県内での生息状況】 低地帯では 1950 年代に旧幸手町（現幸手市）でヤゴが 1 頭得られた記録がある（長須，1973a）のみで、成虫の記録はない。低地帯ではおそらく 1960 年代までには絶滅したと考えられる。現在では丘陵帯に局地的な生息地が知られるのみ。

【特記事項】

科　名　エゾトンボ科

〔和　名〕 **ハネビロエゾトンボ**

〔学　名〕 *Somatochlora clavata* Oguma

埼玉県(2018)　CR　環境省(2015)　VU

指定状況　－

【形　態】 全長 58 ～ 66mm、後翅長 39 ～ 45mm。前種同様、翅は透明で、胸部から腹部にかけて未成熟個体では光沢のある緑色の地色に黄色斑をもつ。成熟すると特にオスでは黄色斑は目立たなくなる。

【国内分布】 北海道、本州、四国、九州　いずれの分布域でも産地は局所的

【主な生息環境】 平地から丘陵地で周囲に樹林があるような細流などに生息する。

【県内での生息状況】 これまでに丘陵帯の数ヶ所から記録があるのみで、生息地はきわめて局地的。これは、ヤゴの環境選好性の幅がかなり狭いことに起因すると考えられる。

【特記事項】 過度の採集圧にさらされることが懸念される。

科　名　ヤマトンボ科

埼玉県(2018)　CR　環境省(2015)　NT

〔和　名〕 **キイロヤマトンボ**

〔学　名〕 *Macromia daimoji* Okumura

指定状況　－

【形　態】 全長 75 ～ 83mm、後翅長 44 ～ 52mm。翅は透明で、胸部から腹部にかけて金緑色の地色に黄色斑をもつ。

【国内分布】 本州（福島県以南）、四国、九州　いずれの分布域でも産地は局地的。

【主な生息環境】 平地から丘陵地にかけて、周囲に樹林のある河川の中・下流域に生息する。ヤゴは砂質の河床を好む。全国的に生息地が局地的なのは、ヤゴの環境選好性の幅が狭いことに起因すると考えられる。

【県内での生息状況】 低地帯での記録は 1959 年の旧幸手町（現幸手市）での 1 例（長須，1959b）のみで、おそらく低地帯では 1960 年代までに絶滅したと考えられる。これまでに知られている生息地は東松山市や川越市など丘陵帯のごく一部の地域に限られ、いずれも河川改修により現在ではその生息環境は失われている。県内では 1991 年に東松山市上唐子でオス 1 頭が得られた（須田，1994）のがもっとも新しい確実な記録である。

【特記事項】 東京大学総合博物館（2013）により、東松山市と川越市で 1960 年代に得られた成虫 3 頭、羽化殻 1 例の標本写真が Web 上で公開されている。最近でも、不確実ながら本種と思われる飛翔個体の目撃例が複数存在する。

科　名　トンボ科

埼玉県(2018)　CR　環境省(2015)　EN

〔和　名〕 **オオキトンボ**

〔学　名〕 *Sympetrum uniforme* (Selys)

指定状況　－

【形　態】 全長 44 ～ 52mm、後翅長 31 ～ 39mm。翅は透明で全体が薄い橙色を呈す。胸部から腹部にかけてほぼ黄褐色一色で黒紋はない。

【国内分布】 本州、四国、九州　いずれの分布域でも生息地は局地的。

【主な生息環境】 平地から丘陵地にかけて、抽水植物群落が発達した透明度の高い池沼を好む。水深の浅い泥質の岸辺を選んで打水、あるいは打泥産卵を行うため、そのような岸辺の存在も本種の安定した生息には重要とされる。

【県内での生息状況】 1970 年代までは幸手市や旧北川辺町（現加須市）に生息地があった（長須，1978）が、1980 年代には鳩山町や川島町などに散発的な記録があるに過ぎなかった（碓井ほか，1998）。1990 年代に深谷市の利根川河川敷にある河跡湖がやや安定した生息地になっていることが発見されたが、この沼は 2007 年 9 月 7 日と 10 月 27 日の 2 度の台風による氾濫で周辺の草地を含め環境が一変した。さらに、羽化期と繁殖期にそれぞれ豪雨と氾濫に見舞われ、羽化直前のヤゴと羽化後の成虫、飛来した成虫の産卵した卵にも壊滅的な打撃があったと考えられ（碓井，2009）、翌年以降、同地で本種の生息は確認されていない。また、2005 年頃から特定外来植物ミズヒマワリ *Gymnocoronis spilanthoides* が侵入し、本種の産卵場所となる泥質の岸辺を覆い隠すほど群落を形成している（碓井，2008）。現在の状況が新たな氾濫などで変わらない限り、他所から複数の本種が飛来したとしても、同地で新たな繁殖集団を形成することは難しいと考えられる。

【特記事項】 普通種のショウジョウトンボ *Crocothemis servilia* の未熟個体と非常によく似ており、野外での目視による確認には注意が必要。

科　名　モノサシトンボ科

埼玉県(2018)　EN　環境省(2015)　EN

〔和　名〕 **オオモノサシトンボ**

〔学　名〕 *Copera tokyoensis* Asahina

指定状況　－

【形　態】 全長 42 ～ 51mm、後翅長 21 ～ 26mm。翅は透明で、胸部と腹部の地色は成熟オスは薄青色、メスは薄緑色。雌雄とも腹部背面には黒条をもつ。

【国内分布】 本州（宮城県、新潟県、関東地方の一部。いずれの地でも産地は局地的）

【主な生息環境】 平野部にある抽水植物群落が発達した池沼に限って生息する。

【県内での生息状況】 低地帯に局地的な生息地が知られるが、1980年代以降、埋め立てや釣り堀化などで生息地の減少が著しい。県内には現在でも数ヶ所の生息地があるが、その中でも特に安定した生息地と考えられている杉戸町の生息地では2014年から発生数が激減した。この現象は、池内に繁茂するハスを花期終了後も放置し続けたことで水中に残った大量の枯死部が水質悪化を招いていることと、池周辺の草地の年複数回の除草により、本種の未熟時の生活空間が失われていることの２つが主要な原因であろうと、これまでの10年間の継続調査から推察される。

【特記事項】 県内に広く分布する近縁のモノサシトンボ *C. annulata* とは外部形態の差異は少ない。上述の杉戸町の生息地は、環境省により『生物多様性の観点から重要度の高い湿地』として 2016 年に選定された。選定理由は「局限分布する希少なトンボ類 2 種の生息地」（環境省，2016）。

科　名　イトトンボ科

埼玉県(2018)　EN　環境省(2015)　NT

〔和　名〕 **ベニイトトンボ**

〔学　名〕 *Ceriagrion nipponicum* Asahina

指定状況　－

【形　態】 全長 32 ～ 45mm、後翅長 17 ～ 23mm。翅は透明で、腹部は成熟したオスは赤色、メスは淡褐色になる。

【国内分布】 本州、四国、九州　東日本での分布は局地的。

【主な生息環境】 抽水植物や浮葉植物が繁茂する明るい池沼に生息する。

【県内での生息状況】 1970 年代は低地帯から低山帯にかけて生息地は点在していたが、現在では県内に数ヶ所の生息地が知られるのみ。そのうちの 1 ヶ所については、2006 年前後に県内の他の生息地から意図的に移入された複数個体に由来する個体群であることが報告されている（碓井，2016b）。

【特記事項】 九州以南に分布する近縁種リュウキュウベニイトトンボ *C. auranticum* が、最近になって関東地方でも発見されている（たとえば三鷹市：佐久間，2013）。この個体の由来は不明だが、南方系の水草の移植に伴う随伴移入や意図的移入などが考えられ、今後、県内の既知産地以外から‘ベニイトトンボ’が確認された場合は、同定も含めてその記録の扱いには注意が必要である。

科　名　イトトンボ科

埼玉県(2018)　EN　環境省(2015)　NT

〔和　名〕 **モートンイトトンボ**

〔学　名〕 *Mortonagrion selenion* (Ris)

指定状況　－

【形　態】 全長 22 ～ 32mm、後翅長 11 ～ 18mm。翅は透明で、成熟したオスは胸部側面の緑色と腹部のオレンジ色の色彩が美しい。成熟メスの地色は淡い緑色。

【国内分布】 北海道（南部）、本州、四国、九州

【主な生息環境】 平野部から丘陵地にかけての湿地や水田などで発生する。植生遷移初期の耕作放棄田など、草丈の低い湿性植物が生育する明るい環境を好む。

【県内での生息状況】 かつては低地帯から低山帯にかけての湿地的環境には広く生息していたと考えられるが、現在では、低地帯では久喜市に 1 ヶ所生息地が知られるのみ（長須，2001; 斉藤，2016b）

【特記事項】 県内では、本種が好む環境は埋め立てなどによる消滅だけでなく、植生遷移によって生育植物の種構成の変化や乾燥化が進むため、安定的な生息地はほとんどないと考えられる。

科　名　カワトンボ科　　埼玉県(2018) VU　環境省(2015) NT

〔和　名〕 **アオハダトンボ**

〔学　名〕 *Calopteryx japonica* Selys　　指定状況 －

【形　　態】 全長 55 ～ 63mm、後翅長 31 ～ 40mm。翅はオスは青藍色、メスは淡褐色。胸部から腹部にかけて成熟したオスは光沢のある緑色となる。

【国内分布】 本州、九州

【主な生息環境】 平野部から丘陵地にかけて、河床が砂質で抽水植物や沈水植物が豊かな清流に生息する。

【県内での生息状況】 比企丘陵を中心に点在する生息地では、良好な発生状況が確認されている。しかし、大宮台地以東では、水質悪化や護岸工事による繁殖環境の消失により、すでに絶滅していると考えられる。

【特記事項】

科　名　ヤンマ科　　埼玉県(2018) VU　環境省(2015) NT

〔和　名〕 **アオヤンマ**

〔学　名〕 *Aeschnophlebia longistigma* Selys　　指定状況 －

【形　　態】 全長 66 ～ 79mm、後翅長 40 ～ 50mm。翅は透明で、成熟した個体は複眼も含め黄緑色を基調とした体色。腹部各節の背面には黒条が連なる。

【国内分布】 北海道、本州、四国、九州　いずれの分布域でも産地はやや局地的

【主な生息環境】 平野部から丘陵地の湿地や池沼に生息し、草丈の高い抽水植物群落が発達した環境を好む。

【県内での生息状況】 分布域の中心は低地帯から大宮台地にかけてで、県西部では日高市や秩父市などから記録があるのみ。2014 ～ 2016 年の調査では、羽生市や加須市に安定的な生息地があることを確認しているが、県下全体を見ると生息地は減少する一方である。

【特記事項】

科　名　ヤンマ科　　埼玉県(2018) VU　環境省(2015) －

〔和　名〕 **オオルリボシヤンマ**

〔学　名〕 *Aeshna crenata* Hagen　　指定状況 －

【形　　態】 全長 76 ～ 94mm、後翅長 49 ～ 63mm。翅は透明で、胸部から腹部にかけて暗色の地色に青色～黄緑色の斑紋を散りばめる。埼玉県に生息するトンボの中ではオニヤンマに次ぐ大型の種。

【国内分布】 北海道、本州、九州

【主な生息環境】 平野部から山地にかけて、周囲を樹林で囲まれ水生植物が豊富な池沼を好む。

【県内での生息状況】 これまで低地帯から台地・丘陵帯では未記録。低山帯では谷戸上部の溜め池などが主な生息場所。

【特記事項】

科　名　サナエトンボ科　　埼玉県(2018) VU　環境省(2015) VU

〔和　名〕 **ナゴヤサナエ**

〔学　名〕 *Stylurus nagoyanus* (Asahina)　　指定状況 －

【形　　態】 全長 59 ～ 65mm、後翅長 33 ～ 37mm。翅は透明で、胸部から腹部にかけて黒色の地色に明色斑をもつ。雌雄とも腹部第 7 ～ 9 節が横に拡がる。

【国内分布】 本州、四国、九州　　北海道からの記録もある。　日本特産種

【主な生息環境】 平地から丘陵地にかけての河川中・下流域に生息し、ヤゴは砂泥質の河床を好む。成虫は真夏に羽化するが、成虫の繁殖域からヤゴは流下して羽化をすると考えられ、成虫の繁殖行動が観察されない地域でも、羽化場所から飛来したと考えられる個体が記録されることがしばしばある。

【県内での生息状況】 成虫の記録は低地帯から大宮台地までに多く、流水環境のない滑川町の森林公園からも記録されている（森田，2015）。低山帯より上部の地帯では記録がない。

【特記事項】

科　名　サナエトンボ科

〔和　名〕 **ホンサナエ**

〔学　名〕 *Shaogomphus postocularis* (Selys)

埼玉県(2018)　VU　環境省(2015)　－

指定状況　－

【形　態】 全長 49 ～ 55mm、後翅長 29 ～ 32mm。翅は透明で、胸部から腹部にかけて黒色の地色に明色斑をもつ。

【国内分布】 北海道、本州、四国、九州

【主な生息環境】 平野部から丘陵地にかけての河川中・下流域に生息し、ヤゴは砂泥質の河床を好む。琵琶湖などの湖にも生息するが、これは湖の岸辺が河川と同様の流水的な環境であるからと考えられている。

【県内での生息状況】 長須（1978）によれば、1958 ～ 1960 年頃には中川・加須低地の各地にも多産したが、1970 年代半ばにはこの地帯からの発見が難しくなったという。現在は丘陵帯の水質のよい河川がおもな生息地で、低地帯では絶滅したと考えられる。大宮台地周辺ではさいたま市東部に小規模な発生地が知られている（鵜飼，2008c）ほか、荒川流域でも希に成虫が記録されるが、これらは上流の生息域から流下したヤゴから羽化した個体と考えられる。

【特記事項】

科　名　サナエトンボ科

〔和　名〕 **キイロサナエ**

〔学　名〕 *Asiagomphus pryeri* (Selys)

埼玉県(2018)　VU　環境省(2015)　NT

指定状況　－

【形　態】 全長 60 ～ 69mm、後翅長 37 ～ 44mm。翅は透明で、胸部から腹部にかけて黒色の地色に明色斑をもつ。近縁のヤマサナエ *A. melaenops* とは雌雄とも腹端部の形状などから区別できる。和名でもある「黄色」は、未成熟の雌雄と成熟したメスの明色斑の色には当てはまるが、成熟したオスの明色斑は灰緑色となる。これはヤマサナエにも当てはまり、体色から両種を区別することはできない。

【国内分布】 本州、四国、九州、南西諸島　日本特産種

【主な生息環境】 平野部から丘陵地の周囲に樹林のある河川中流域がおもな生息地で、ヤゴは砂泥質の河床を好む。

【県内での生息状況】 1950 年代には中川・加須低地でも記録されていたが（長須，1973a）、現在はこの地帯では絶滅したと考えられる。現在はさいたま市や東松山市などに局地的な生息地が知られるのみ。生息地が限定されているのは、ヤゴの環境選好性の幅がかなり狭いことに起因すると考えられる。

【特記事項】

科　名　ムカシヤンマ科

〔和　名〕 **ムカシヤンマ**

〔学　名〕 *Tanypteryx pryeri* (Selys)

埼玉県(2018)　VU　環境省(2015)　－

指定状況　－

【形　態】 全長 63 ～ 80mm、後翅長 39 ～ 48mm。翅は透明で、胸部から腹部にかけて黒色の地色に黄色斑をもつ。

【国内分布】 本州、九州　日本特産種

【主な生息環境】 丘陵地から山地にかけて生息するが、ヤゴは湿気のある土質の斜面に掘った孔で生活するため、そのような環境を含む樹林帯に囲まれた場所に限って生息する。

【県内での生息状況】 県内での記録は丘陵帯にほぼ限られ、生息地は限定される。

【特記事項】 過度の採集圧にさらされることが懸念される。

科　名　エゾトンボ科

埼玉県(2018)　VU　環境省(2015)　－

〔和　名〕 **トラフトンボ**

〔学　名〕 *Epitheca marginata* (Selys)

指定状況　－

【形　　態】 全長 50 ～ 58mm、後翅長 33 ～ 39mm。翅は透明で、胸部から腹部にかけて黒色の地色に黄色斑をもつ。

【国内分布】 本州、四国、九州

【主な生息環境】 平地から丘陵地にかけて、水生植物群落がよく発達した池沼に限って生息する。

【県内での生息状況】 1950 年代には低地帯から低山帯までの水生植物が繁茂する池沼には普通に見られたが、その後、埋め立てや釣り堀化などで生息できる池沼は激減した（長須，1973a,b）。近年の記録は、1995 年に北本市（磯野，1995）、2005 年に旧北川辺町（現加須市）（鵜飼，2008b）、2011 年に蓮田市（福田ほか，2011）などがあり、かろうじて絶滅を免れているといった生息状況と考えられていたが、2015 ～ 2016 年にかけて滑川町（森田ほか，2015）、久喜市、さいたま市、加須市（斉藤，2016c）で新たな生息地が発見された。

【特記事項】 県内の池沼では水質汚濁による水生植物の衰退も指摘されている（埼玉県，2011）が、本種の生息地が新たに複数見つかったことは、各地で進行している公園整備の一環として、自然度の高い水辺環境を保全・創成する取組みの成果との見方もされている。

科　名　トンボ科

埼玉県(2018)　VU　環境省(2015)　－

〔和　名〕 **ヒメアカネ**

〔学　名〕 *Sympetrum parvulum* (Bartenef)

指定状況　－

【形　　態】 全長 28 ～ 38mm、後翅長 20 ～ 29mm。翅は透明。近縁のマユタテアカネ *S. eroticum* とは形態的によく似ているが、顔面の眉状斑の有無やオス腹端部の形状などで区別できる。

【国内分布】 北海道、本州、四国、九州

【主な生息環境】 平地から山地にかけて樹林が隣接する湿地的環境に生息する。

【県内での生息状況】 低地帯における記録はきわめて少ない（碓井ほか，1998）。台地・丘陵帯から低山帯まで分布域は広いが、いずれの地帯でも生息地は局所的である。

【特記事項】 湿地的環境に依存しており、成虫の環境選好性の幅は狭い。植生遷移の過程で環境が不適になるとそこでの個体群の維持はできなくなるため、本種が安定的に生息できる場所は少ないと考えられる。

科　名　トンボ科

埼玉県(2018)　VU　環境省(2015)　－

〔和　名〕 **キトンボ**

〔学　名〕 *Sympetrum croceolum* (Selys)

指定状況　－

【形　　態】 全長 37 ～ 47mm、後翅長 25 ～ 32mm。翅は透明で、前後翅とも前縁と基部よりの半分程度が橙色になる。胸部から腹部にかけてほぼ橙色一色で、成熟オスは腹部背面が赤くなる。

【国内分布】 北海道、本州、四国、九州

【主な生息環境】 平地から低山帯にかけての池沼に生息する。周囲に樹林があり、切り立ったような岸辺のある明るい池沼を好む。

【県内での生息状況】 低地帯からは未記録。丘陵帯から低山帯にかけて局地的に記録がある。長瀞町の荒川周辺には安定的な生息地が知られているが、寄居町や皆野町、滑川町でも偶飛個体と思われる成虫の記録が散見される（新井，1996; 森田，2016 など）。

【特記事項】

科　名　トンボ科
〔和　名〕 **ヨツボシトンボ**
〔学　名〕 *Libellula quadrimaculata* Schmidt

埼玉県(2018)　VU　環境省(2015)　－
指定状況　－

【形　態】 全長 38 ～ 52mm、後翅長 31 ～ 38mm。翅は透明で前後翅とも結節附近に明瞭な暗色斑がある。体色は明褐色の地色に黄色斑をもつ。

【国内分布】 北海道、本州、四国、九州

【主な生息環境】 平野部から山地にかけて日当たりのよい抽水植物の多い池沼に生息する。

【県内での生息状況】 分布域の中心は台地・丘陵帯で、秩父市郊外からも記録がある（埼玉県環境部環境審査課，1992）。

【特記事項】 飛翔力が強く、また環境選好性の幅が狭い。開放水面の広いビオトープ池を創成すると、植生遷移の初期段階に見られる抽水植物がまばらに生育するような環境の時期に侵入し、遷移が進行して開放水面が減少するまでの数年間に限って一時的に定着することも多い。

科　名　ムカシトンボ科
〔和　名〕 **ムカシトンボ**
〔学　名〕 *Epiophlebia superstes* (Selys)

埼玉県(2018)　NT1　環境省(2015)　－
指定状況　－

【形　態】 全長 45 ～ 56mm、後翅長 26 ～ 32mm。翅は透明で前後翅の形状はよく似ている。体色は胸部から腹部にかけて黒地に黄斑をもつ。

【国内分布】 北海道、本州、四国、九州　日本特産種

【主な生息環境】 山間部の河川の源流域に生息する。オスは周辺の尾根筋に飛来することもある。

【県内での生息状況】 低山帯から山地帯の渓流が主な生息地だが、標高 100 mほどの丘陵帯の清流にも産地がある。

【特記事項】

科　名　ヤンマ科
〔和　名〕 **コシボソヤンマ**
〔学　名〕 *Boyeria maclachlani* (Selys)

埼玉県(2018)　NT1　環境省(2015)　－
指定状況　－

【形　態】 全長 77 ～ 92mm、後翅長 48 ～ 60mm。翅は透明で成熟したオスは翅端に小さな褐色斑をもつ。胸部から腹部にかけて暗色の地色に黄斑をもつ。

【国内分布】 北海道、本州、四国、九州、南西諸島

【主な生息環境】 平野部から丘陵地の樹林に囲まれた清流に生息する。

【県内での生息状況】 県内ではこれまでに低地帯からの記録はない。丘陵帯から低山帯の清流にやや局地的に生息する。

【特記事項】

科　名　ヤンマ科
〔和　名〕 **ルリボシヤンマ**
〔学　名〕 *Aeshna juncea* (Linnaeus)

埼玉県(2018)　NT1　環境省(2015)　－
指定状況　－

【形　態】 全長 68 ～ 90mm、後翅長 45 ～ 57mm。翅は透明で、胸部から腹部にかけて暗色の地色に青色～黄緑色の斑紋を散りばめる。近縁のオオルシボシヤンマ *A. crenata* とは、胸部側面の明色斑の形状やオス腹端部の微細な形状で区別できる。

【国内分布】 北海道、本州、四国

【主な生息環境】 平野部から山地にかけて、周囲を樹林で囲まれ水生植物が豊富な池沼を好む。

【県内での生息状況】 これまで低地帯からは未記録。低山帯では谷戸上部の溜め池などが主な生息場所である。

【特記事項】

科　名　サナエトンボ科
〔和　名〕 **アオサナエ**
〔学　名〕 *Nihonogomphus viridis* Oguma

埼玉県(2018)　NT1　環境省(2015)　－
指定状況　－

【形　　態】 全長 57 ～ 65mm、後翅長 29 ～ 38mm。翅は透明で、胸部から腹部にかけて黒色の地色に黄緑色の斑紋をもつ。オスの腹部第 7 ～ 9 節は横に拡がる。

【国内分布】 本州、四国、九州　日本特産種

【主な生息環境】 丘陵部を流れる河床が砂質の河川中流域に生息する。大規模な湖に生息することも知られている。

【県内での生息状況】 これまで低地帯からは未記録。大宮台地周辺では、流下してきたヤゴに由来すると思われる成虫の記録があるが（高橋，1990）、大宮台地周辺は本来の分布域ではないと考えられる。分布の中心は丘陵帯から低山帯を流れる河川中流域。

【特記事項】

科　名　サナエトンボ科
〔和　名〕 **クロサナエ**
〔学　名〕 *Davidius fujiama* Fraser

埼玉県(2018)　NT1　環境省(2015)　－
指定状況　－

【形　　態】 全長 36 ～ 51mm、後翅長 21 ～ 30mm。翅は透明で、胸部から腹部にかけて黒色の地色に明色斑をもつ。形態的によく似ているクロサナエ・ヒメクロサナエ・ヒメサナエの 3 種は、胸部前面と側面の明色斑の形状や腹端部の形状で区別できる。

【国内分布】 本州、四国、九州　日本特産種

【主な生息環境】 丘陵地から山地の渓流に生息する。

【県内での生息状況】 比企丘陵から秩父山地にかけての清流に生息する。低地帯や大宮台地からはこれまで未記録。山間部の渓流の上流部に見られる。

【特記事項】

科　名　サナエトンボ科
〔和　名〕 **ヒメクロサナエ**
〔学　名〕 *Lanthus fujiacus* (Fraser)

埼玉県(2018)　NT1　環境省(2015)　－
指定状況　－

【形　　態】 全長 38 ～ 46mm、後翅長 24 ～ 30mm。翅は透明で、胸部から腹部にかけて黒色の地色に明色斑をもつ。

【国内分布】 本州、四国、九州　日本特産種

【主な生息環境】 丘陵地から山地の渓流に生息する。

【県内での生息状況】 比企丘陵から秩父山地にかけての清流に生息する。低地帯や大宮台地からはこれまで未記録。山間部の渓流の上流部に見られる。

【特記事項】

科　名　サナエトンボ科
〔和　名〕 **ヒメサナエ**
〔学　名〕 *Sinogomphus flavolimbatus* (Matsumura in Oguma)

埼玉県(2018)　NT1　環境省(2015)　－
指定状況　－

【形　　態】 全長 41 ～ 47mm、後翅長 24 ～ 28mm。翅は透明で、胸部から腹部にかけて黒色の地色に明色斑をもつ。

【国内分布】 本州、四国、九州　日本特産種

【主な生息環境】 丘陵地から山地の渓流に生息する。低地帯や大宮台地からはこれまで未記録。

【県内での生息状況】 寄居町の荒川流域での調査では、成虫の繁殖域からヤゴが流下し、より下流域で羽化するという（喜多，2001）。

【特記事項】

科　名　イトトンボ科
〔和　名〕**キイトトンボ**
〔学　名〕*Ceriagrion melanurum* Selys

埼玉県(2018)　NT2　環境省(2015)　－
指定状況　－

【形　態】全長 31 ～ 48mm、後翅長 15 ～ 26mm。翅は透明で、腹部は成熟したオスは鮮黄色、メスは黄緑色になる。

【国内分布】本州、四国、九州、南西諸島

【主な生息環境】抽水植物が繁茂する明るい池沼に生息する。

【県内での生息状況】かつては低地帯から低山帯にかけての池沼や水田で普通種であった。現在では、大宮台地以東の既知産地は数ヶ所が残るのみだが，丘陵帯から低山帯にかけては安定した産地が点在している。

【特記事項】

科　名　ヤンマ科
〔和　名〕**サラサヤンマ**
〔学　名〕*Sarasaeshna pryeri* (Martin)

埼玉県(2018)　NT2　環境省(2015)　－
指定状況　－

【形　態】全長 57 ～ 68mm、後翅長 35 ～ 41mm。翅は透明で、胸部から腹部にかけて黒地に黄斑をもつ。ヤンマ科の中ではたいへん小型の種。

【国内分布】北海道、本州、四国、九州、南西諸島

【主な生息環境】灌木が点在するような植生遷移がある程度進んだ湿地などに生息する。

【県内での生息状況】分布の中心は台地・丘陵帯で、低地帯にもわずかながら産地が残されている。

【特記事項】

科　名　ヤンマ科
〔和　名〕**ネアカヨシヤンマ**
〔学　名〕*Aeschnophlebia anisoptera* Selys

埼玉県(2018)　NT2　環境省(2015)　NT
指定状況　－

【形　態】全長 75 ～ 88mm、後翅長 45 ～ 55mm。翅は透明で雌雄とも翅端に褐色斑をもち、未熟個体では基部の橙色斑も目立つ。体色は、暗色の地色に黄緑色の斑紋をもつ。

【国内分布】本州（宮城県以南）、四国、九州　いずれの分布域でも産地はやや局地的。

【主な生息環境】平野部から丘陵地の湿地や池沼に生息し、とくに雑木林が隣接する抽水植物群落が発達した湿性環境を好む。

【県内での生息状況】分布の中心は台地・丘陵帯で、低地帯にもわずかながら記録がある。

【特記事項】

科　名　ヤンマ科
〔和　名〕**マルタンヤンマ**
〔学　名〕*Anaciaeschna martini* (Selys)

埼玉県(2018)　NT2　環境省(2015)　－
指定状況　－

【形　態】全長 65 ～ 84mm、後翅長 41 ～ 50mm。翅はオスは透明、メスは成熟すると基部は黒褐色で翅全体はくすんだ淡褐色になる。体色は、成熟オスは暗色の地色で胸部側面から腹部の基部に青色斑をもち、成熟メスは褐色の地色で胸部側面から腹部の基部に黄緑色斑をもつ。

【国内分布】本州、四国、九州、南西諸島

【主な生息環境】平野部から低山帯の湿地や池沼に生息し、とくに雑木林が隣接する抽水植物群落が発達した湿性環境を好む。

【県内での生息状況】分布の中心は台地・丘陵帯で、低地帯からは未記録。

【特記事項】

科　名　サナエトンボ科
〔和　名〕 **ヤマサナエ**
〔学　名〕 *Asiagomphus melaenops* (Selys)

埼玉県(2018) NT2　環境省(2015) －
指定状況 －

【形　態】 全長 62 ～ 73mm、後翅長 35 ～ 46mm。翅は透明で、胸部から腹部にかけて黒色の地色に明色斑をもつ。

【国内分布】 本州、四国、九州　日本特産種

【主な生息環境】 丘陵地から山地の樹林に囲まれた河川に生息する。

【県内での生息状況】 丘陵帯を中心に県内の広い範囲から記録があるが、大宮台地以東からは未記録。近縁のキイロサナエ *A. pryeri* と異なり川幅が 1 m にも満たない小規模な流れにも見られる。

【特記事項】

科　名　トンボ科
〔和　名〕 **ハラビロトンボ**
〔学　名〕 *Lyriothemis pachygastra* (Selys)

埼玉県(2018) NT2　環境省(2015) －
指定状況 －

【形　態】 全長 32 ～ 42mm、後翅長 23 ～ 30mm。翅は透明で、オスは未熟時は黄褐色の地色に黒条を散りばめるが、成熟するにしたがい暗灰色一色になり、完全に成熟すると腹部は明灰色になる。メスは未熟時も成熟時も体色に大きな変化はなく、黄褐色の地色に暗色条を散りばめる。

【国内分布】 北海道（南部）、本州、四国、九州、南西諸島

【主な生息環境】 平地から丘陵部にかけての、日当たりが良く抽水植物の多い池沼や湿地的環境に生息する。

【県内での生息状況】 低地帯から低山帯にかけて分布は広いが、成虫の環境選好性の幅は狭く、生息する湿地の植生遷移の進行によっては、侵入後、数年で姿を消す場合もある。近年では、低地帯での生息地の消滅が顕著である。

【特記事項】

科　名　イトトンボ科
〔和　名〕 **ムスジイトトンボ**
〔学　名〕 *Paracercion melanotum* (Selys)

埼玉県(2018) DD　環境省(2015) －
指定状況 －

【形　態】 全長 30 ～ 39mm、後翅長 13 ～ 22mm。胸部と腹部の地色は、成熟したオスは青色、メスは黄褐色。

【国内分布】 本州（東北地方の太平洋沿岸部、関東地方、西日本）、四国、九州、南西諸島

【主な生息環境】 浮葉植物や沈水植物が豊富な平野部の池沼に生息する。人工的な池でも沈水植物があれば一時的に定着することもある。

【県内での生息状況】 越谷市（西田，1995）や幸手市（喜多，2002a）など、散発的な確認例が平野部の数ヶ所から報告されているが，安定的な生息地は知られていない。

【特記事項】 近年、関東地方などでは分布域が北上しているという（尾園ほか，2012）。

科　名　ヤンマ科
〔和　名〕 **マダラヤンマ**
〔学　名〕 *Aeshna mixta* Latreille

埼玉県(2018) DD　環境省(2015) NT
指定状況 －

【形　態】 全長 63 ～ 74mm、後翅長 39 ～ 46mm。翅は透明で、胸部から腹部にかけて暗色の地色に青色～黄緑色の斑紋を散りばめる。

【国内分布】 北海道、本州（東日本）　いずれの分布域でも産地はやや局地的

【主な生息環境】 平野部から丘陵地の湿地や池沼に生息し、草丈の高い抽水植物群落が発達した環境を好む。

【県内での生息状況】 県内では数例の偶飛と思われる記録が知られるのみ（新井，1987,1994）で，発生地は発見されていない。

【特記事項】 近隣他県における生息環境や生態的特性などから、県内でも県北地域から秩父地方にかけて未知の生息地がある可能性は否定できない。